View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

経営情報研究
第19巻第1号(2011年10月), 41－56ページ

**研究論文**

# 青年期における恋愛と性行動に関する研究(2)

## －浮気の判断基準と浮気に対する態度－

牧　野　幸　志

# A Study of the Heterosexual Romantic Relationships and Sexual Behaviors in Adolescence (2)

## ― The Evaluation Standard of the Unfaithful Love and the Attitudes toward the Unfaithful Love ―

Koshi MAKINO

**【要　約】**本研究は，青年期における恋愛と性行動に関する調査研究である。本研究では，まず，現代青年の恋愛と性行動の現状を明らかにする。その後，「浮気」に関する行動の判断基準を明らかにし，現代青年が「浮気」に対してどのような態度を持っており，浮気への行動意志をどの程度持っているかを明らかにする。被験者は，大学生・短大生 200 名(男性 106 名，女性 94 名，平均年齢 19.49 歳)であった。

調査の結果，現代青年において恋愛経験率は 68.5%，別れ経験率は 63.0%，性経験率 45.5%であった。浮気と判断される恋人の行動は，「恋人以外の異性とキス以上の関係を持つ」であった。浮気に対する態度には，「浮気への否定的態度」，「浮気への憧れ」，「浮気の積極的容認」，「浮気の消極的容認」の 4 因子がみられた。浮気への行動意志は，いずれも低かったが，女性よりも男性のほうが浮気意志は強く，恋愛経験よりも性経験が浮気意志に関連している可能性が示された。

**キーワード**：青年期，恋愛，性行動，浮気.

## 1. 問　題

### 1.1. 青年期における恋愛関係と浮気の定義

青年期における男女にとって，恋愛は非常に重要な人間関係である(松井，1993)。恋愛に関する科学的研究は，ようやく進んできたところである(古畑，1990)。恋愛研究は大きく4つに分類される(松井，1990)。それらは，「恋愛に対する態度や認知」，「異性選択と社会的交換」，「恋愛感情と意識」，および「恋愛の進行と崩壊」である。本研究は，主に「恋愛の進行と崩壊」の分野の中の崩壊に関連する「浮気」に焦点を当てている。ある特定の異性と恋愛関係にあるにもかかわらず，他の異性に好意を持つことがある。そして，このことが，恋人との葛藤や関係崩壊の原因となることもある。「浮気」とは，一般的に「配偶者・婚約者などがありながら，他の異性に気がひかれ，関係をもつこと」を意味するが，近年では恋人同士であっても「浮気」という用語が使われている。したがって，本研究では，浮気を「恋人，配偶者，婚約者など特定の異性がいるにもかかわらず，他の異性に恋愛感情をもつこと」と定義して研究を進める。浮気と判断される行動の基準は，いまだ明らかでないため，定義の中に特定の行動を含めず，本研究において，どのような行動が浮気と判断されるかという基準を明らかにしていく。行動基準が明らかになることで，今後，浮気の操作的定義が可能となる。

### 1.2. 浮気行動の判断基準と恋愛関係における排他性の研究

これまで，社会心理学の分野において，「浮気」に関する研究はほとんど行われていない。しかし，浮気に関する研究に示唆を与えるのが，恋愛関係における排他性の研究である(例えば，増田，1994；相馬・浦，2007；相馬・山内・浦，2003)。排他性とは，「特定の関係にある個人がその外部の関係との関わりを抑制することに関して示す感情や行動」を意味する(相馬・浦，2007)。したがって，恋愛関係における排他性とは「ある特定の人と恋愛関係にある個人が，それ以外の異性との関係を抑制することに関して示す感情や行動」である。親密な関係における排他性の研究では，排他的な感情は愛情と密接に関連すること(Rubin，1970)，排他的な振る舞いが恋愛関係の存続可能性に影響すること(増田，1994)が報告されている。すなわち，排他性が高いほど関係内での愛情は高まり，その関係が安定することがわかっている。浮気をするという行為は，恋愛関係において，排他性の低い行動ということとなる。

増田(1994)は，恋愛関係における排他性に注目し，排他性が関係の存続可能性に与える影響を検討している。この研究の中で，「恋愛集団の排他性」を測定する手続きとして，「自分の恋人が自分以外の異性と行う」行動を取り上げている。「一緒に歩く」，「キスをする」などの行動を挙げて，これらの行動に対して，「大変好ましくない」から「大変好ましい」の7段階で評定を求めることで，「恋人の行動に対する排他性」を測定している。例えば，儀礼的な挨拶などの行動を「大変好ましくない」と判断するほど，排他性が高いと判断され，性的なキスなどを「大変好ましい」と判断するほど排他性が低いと判断される。調査の結果，排他性が高いほど，関係の継続性が高く，幸福感も高かった。

増田(1994)において，「恋人の行動の排他性」の測定のために行った「あなたの恋人が，異性と一緒に，以下のような行動を行った場合，どの程度好ましくないと思いますか？」という質

問は,「恋人がどのような行動を取った場合に，浮気だと思いますか？」という浮気行動の判断基準を示していると考えられる。例えば,「キスをする」という行動を「大変好ましくない」という回答をしたということは，恋人がそのような行為を取った場合には「浮気」と判断する傾向があるということである。本研究では，増田(1994)の「恋人が異性と取ると好ましくない行動」を参考にして，浮気行動の判断基準を明らかにしていく。

### 1.3. 先行研究の問題点と本研究の目的

本研究では，まず，現代青年の恋愛と性行動の現状を明らかにしていく。先行研究では，青少年における性行動が注目されることが多かった(牧野，2009； NHK 放送文化研究所，2000，2004; 和田，2004)。しかしながら，青少年の性行動は，恋愛関係の進展とともに進行すると予想されるので，恋愛経験と性経験の両方について検討していく。また，浮気と判断される行動基準については，増田(1994)を参考にし，自分の恋人がどのような行動をとった場合に，浮気と判断するかを明らかにしていく。しかし，増田(1994)では，恋人が他の異性と最も進展した段階を「キスをした」で止めていたが，本研究ではより進展させ「性的な関係をもった」を加えた。また，それぞれの行動を「浮気ではない」,「どちらともいえない」,「浮気である」の中から判断させ，より直接的な質問とした。

以上のように先行研究に改善を加え，本研究は，日本の現代青年における恋愛状況と浮気に対する態度,浮気意志について調べることを目的とする。まず,現代青年の恋愛状況を把握し，その後，恋人がどのような行動をとったときに，浮気と判断するか？という浮気判断について調査をする。さらに，現代の青年が，浮気に対してどのような態度をもっているか，実際の浮気への行動意志をどの程度持っているかを明らかにする。この研究により，浮気判断の境界線や浮気への行動意志などが明らかになれば，浮気の防止への対策に役立つと考えられる。

## 2. 方　法

### 2.1. 被調査者と実施方法

**被調査者**　被調査者は大阪府内の大学生 200 名(男性 106 名，女性 94 名，年齢幅 18～23 歳，平均年齢 19.49 歳)。ただし，欠損値があるため分析により人数が異なる。「青年期における恋愛に関する研究」として無記名で実施した。調査は授業の一部を用いて行い，できるかぎり隣座席を空けるよう指示し，プライバシーに配慮した。

### 2.2. 調査項目

**恋愛状況　恋愛経験の有無**　これまでに異性とつきあったことがあるかを質問した。「ある，ない」から 1 つを選択させた。　**別れ経験の有無**　これまでに恋人との別れを経験したことがあるかを質問した。「ある，ない」から選択し,「ある」場合には，その回数を回答してもらった。　**性経験の有無**　これまでに異性との性経験があるかを質問した。「ある，ない」から 1 つを選択させた。

**浮気の判断基準**　増田(1994)を基にして，自分の恋人がどのような行動をとった場合に，浮気と感じるか？を「異性に挨拶をした」～「性的関係をもっていた」の各行動基準段階で,「浮

気ではない」,「どちらともいえない」,「浮気である」の3つの選択肢の中から選択させた。浮気と判断される行動基準は，増田(1994)を参考に，儀礼的なものから順に配列した。浮気の判断基準項目の詳細をTable 1に示す。

**浮気　浮気に対する態度**　独自に作成した浮気に関する20項目に対して,「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の5段階で評定させた。これらの回答の際には,「浮気」に関して特に説明は加えず,被調査者が考える浮気について回答を求めた。 **浮気意志　浮気関心**　浮気に関心・興味がある　**浮気願望**　浮気をしてみたい　**浮気機会**　適当な相手がいれば，浮気をする　各項目に対して,「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」の5段階で評定させた。これらの回答の際には,「浮気」に関して特に説明は加えず，被調査者が考える浮気について回答を求めた。

**Table 1　浮気行動の判断基準項目**

1. 異性に挨拶をした。
2. 異性と立ち話をしていた。
3. 異性と日常生活の情報交換をしていた。
4. 彼(女)が相手に声をかけた。
5. 2人が集団の中で一緒に歩いていた。

6. 異性と2人きりで歩いていた。
7. 異性の隣に座っていた。
8. 彼(女)が悩みごとの相談にのっていた。
9. 誕生日のプレゼントを贈っていた。
10. 用もないのに電話をしていた。

11. 2人だけで映画を見に行った。
12. 2人だけで食事に行った。
13. 2人だけで日帰り旅行に出かけていた。
14. 2人だけで1泊旅行に出かけていた。
15. 相手の肩や髪に触れた。

16. 手をつないでいた。
17. 抱き合っていた。
18. キスをしていた。
19. 性的関係をもっていた。

## 3. 結　果

### 3.1. 現代青年の恋愛状況

**恋愛経験**　これまでに異性とつきあったことがある大学生は，全体の全体の 68.5%であった。200名中137名(男性63名,女性74名)であった。男女別にみると,恋愛経験のある男性は59.4%,女性は 78.7%であった。

**別れ経験**　これまでに恋人と別れたことがある大学生は，全体の 63.0%であった。200 名中 126 名(男性 56 名，女性 70 名)であった。男女別にみると，別れた経験のある男性は 52.8%，女性は 78.7%であった。別れたことがある人の別れた回数の範囲は，1～16 回であった。最頻値は 1 回であった。

**性経験**　これまで性経験のある大学生は，全体の 45.5%であった。200 名中 91 名(男性 41，女性 50 名)であった。約半数の人は性経験があった。男女別にみると，性経験のある男性は 38.7%，女性は 53.2%であった。

### 3.2. 浮気行動の判断基準

自分の恋人が，異性とどのような行動をとった場合に,「浮気」と判断するかを分析した。異性との行動を挨拶などの儀礼的な行動から並べ，それぞれの行動に対して,「浮気でない」,「どちらともいえない」,「浮気である」の判断をしてもらい，その比率を比べた(Figure5, Figure6 参照)。その結果,「異性に挨拶をした」や「異性と立ち話をしていた」などの儀礼的行動の場合には，90%以上の人が「浮気でない」と判断していた。その後,「異性と 2 人きりで歩いていた」では,「浮気でない」と判断する人の割合が急激に減り,「どちらともいえない」と「浮気ではない」が同程度の割合であった。さらに，恋人以外の異性との共行動が進行するにつれ,「浮気ではない」が減り,「どちらともいえない」が増加し続けている。そして,「2 人だけで映画を見に行った」や「2 人だけで食事に行った」という行動で,「浮気である」と判断する人が増えている。さらに，その 2 人だけの行動内容が,「日帰り旅行」や「1 泊旅行」などの「旅行」となったときに,「浮気ではない」という判断が急減し,「浮気である」という判断が急増している。異性の「肩や髪に触れる」，異性と「手をつなぐ」という身体接触は必ずしも「浮気である」という判断をされていなかった。しかし,「キスをする」(96%),「性的関係を持つ」(97%)という行動は，95%以上の人が「浮気である」という判断をしていた。さらに，男女別にその比率を比較したが，性差はみられなかった。

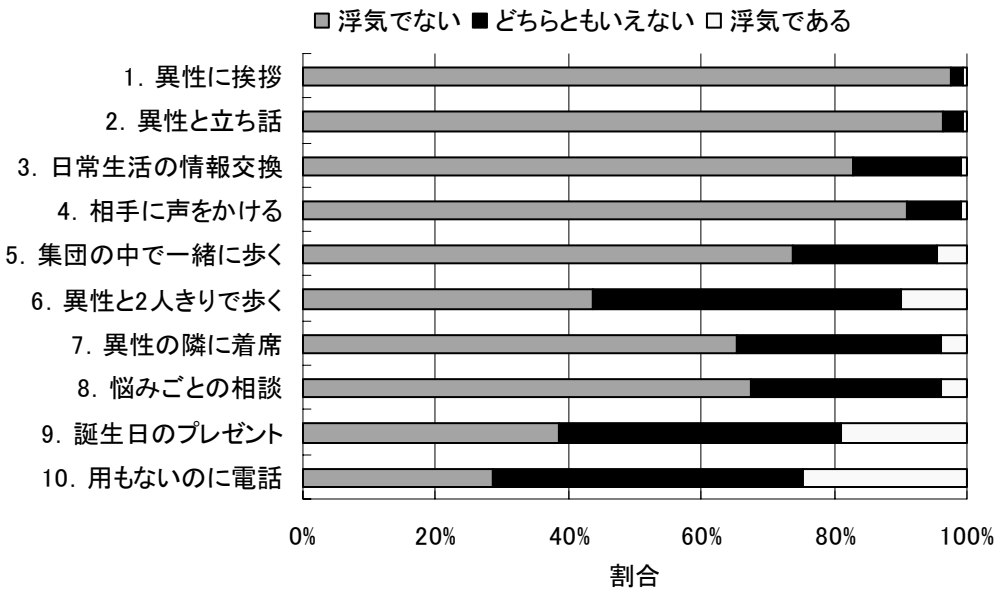


Figure 1. 浮気行動の判断基準　前半

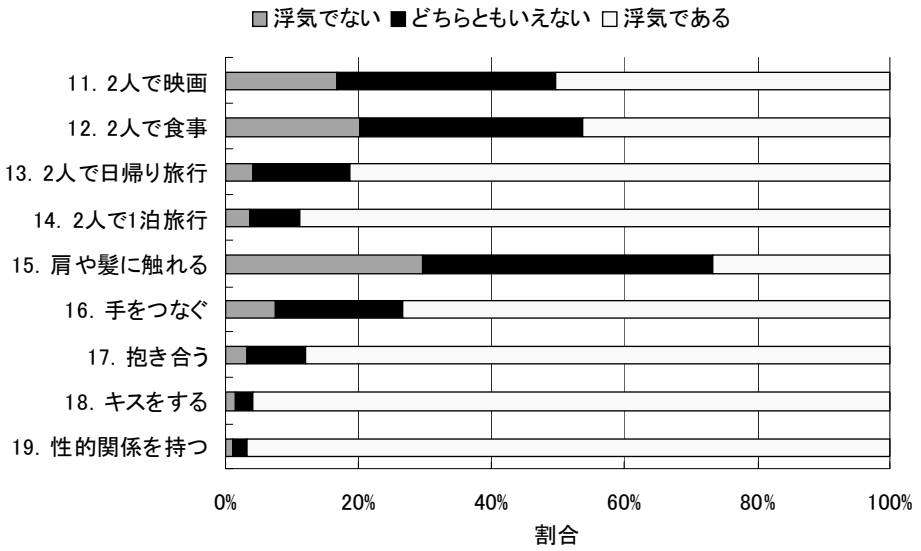


Figure 2.　浮気行動の判断基準　後半

### 3.3. 浮気に対する態度

#### 3.3.1. 浮気に対する態度に関する因子分析

浮気に関する 20 項目の評定値に対して因子分析を行なった(Table 2)。固有値 1 を基準とする因子分析(主因子法，バリマックス回転)を行なった結果，4 因子構造ととらえた。第 1 因子は“浮気は，恋人に対する裏切り行為である。”，“浮気は淫らな行為である。”など浮気に対する否定的な意見を表す項目に負荷が高かった。したがって，これらを「浮気への否定的な態度」因子とした。そして，「浮気への否定的な態度」を示す 5 項目(α=.714)の平均を「浮気への否定的態度」得点として算出した（1～5 点，得点が高いほど，浮気への否定的な考えが強いことを示す)。第 2 因子は“浮気に憧れる。”，“浮気は，社会的ステータス(地位)を高める。”など 4 項目に負荷が高かった。これらは，浮気に対する憧れを表す態度と捉えられたので「浮気への憧れ」因子と命名した。これら 4 項目（α=.711）の平均を「浮気への憧れ」得点として算出した（1～5 点，得点が高いほど，浮気への憧れが強いことを示す)。第 3 因子は“浮気から生じる真実の愛もある。”，“恋愛も浮気も本質は同じである。”など浮気を積極的に認める態度項目に負荷が高かったため，「浮気の積極的容認」因子とした。これら「浮気の積極的容認」に関する 6 項目（α=.727）の平均値を「浮気の積極的容認」得点として算出した（1～5 点，得点が高いほど，浮気を積極的に容認する考えが強いことを示す)。第 4 因子は“何度も言い寄られたら，浮気をしてしまいそうだ。”，“浮気は，本能的な行為である。”など場合によっては浮気をするかもしれない，浮気は本能なので仕方がないという消極的に浮気を認める態度項目に負荷が高かった。したがって，これらを「浮気の消極的容認」因子とした。そして，「浮気の消極的容認」を示す 3 項目（α=.607）の平均を「浮気の消極的容認」得点として算出した（1～5 点，得点が高いほど，浮気を消極的に容認する考えが強いことを示す)。

Table 2 浮気に対する態度項目の因子分析の結果(バリマックス回転後)

| 項　目 | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 | 共通性 |
|---|---|---|---|---|---|
| **浮気への否定的態度** | | | | | |
| 1. 浮気は，恋人に対する裏切り行為である。 | **.626** | -.219 | .000 | .041 | .442 |
| 8. 浮気は淫らな行為である。 | **.614** | .021 | .036 | -.202 | .420 |
| 6. 浮気は道徳に反している。 | **.592** | -.094 | -.132 | -.167 | .405 |
| 17. 浮気には罪悪感がともなう。 | **.534** | -.092 | .005 | .198 | .333 |
| 13. 浮気をする人は，人間として最低である。 | **.524** | .052 | -.164 | -.254 | .369 |
| **浮気への憧れ** | | | | | |
| 5. 浮気に憧れる。 | -.134 | **.733** | .055 | .185 | .593 |
| 4. 自分の好みの人から誘われたら，浮気をしてしまう。 | -.212 | **.623** | .052 | .615 | .814 |
| 20. 浮気は，社会的ステータス(地位)を高める。 | -.395 | **.458** | .236 | .070 | .427 |
| 16. 浮気は，性的快楽である。 | -.031 | **.400** | .283 | .042 | .243 |
| **浮気の積極的容認** | | | | | |
| 12. 浮気から生じる真実の愛もある。 | -.236 | .253 | **.601** | .004 | .481 |
| 18. 浮気であっても，好きならば仕方ない。 | -.251 | .193 | **.555** | .318 | .509 |
| 15. 恋愛も浮気も本質は同じである。 | -.236 | .190 | **.544** | .159 | .413 |
| 10. 浮気は心の迷いから生じる。 | .280 | .094 | **.441** | .041 | .283 |
| 7. 浮気をするのは，恋人に問題がある。 | -.022 | -.023 | **.438** | .057 | .196 |
| 11. 一度くらいの浮気は許される。 | -.465 | .361 | **.418** | .069 | .526 |
| **浮気の消極的容認** | | | | | |
| 19. 何度も言い寄られたら，浮気をしてしまいそうだ。 | -.234 | .395 | .171 | **.611** | .614 |
| 2. 浮気は，本能的な行為である。 | -.252 | .146 | .285 | **.513** | .430 |
| 3. 浮気をする人は勇気がある。 | .045 | .031 | .046 | **.452** | .210 |
| **残余項目** | | | | | |
| 9. 浮気はばれなければかまわない。 | -.577 | .311 | .263 | .182 | .533 |
| 14. 浮気のドキドキが浮気を生じさせる。 | .024 | .360 | .349 | .104 | .263 |

$N$ =200

### 3.3.2. 浮気に対する態度の性差

浮気に対する態度の各因子が男女により異なるかを検討した。各因子得点に対して性別による t 検定を行った(Table 3 参照)。

**浮気への否定的な態度**　浮気へ否定的な態度得点に対して,性別による t 検定を行った結果,有意差はみられなかった($t$(198)=1.59, $n.s.$)。性差はみられなかった。

**浮気への憧れ**　浮気への憧れ得点に対して，性別による t 検定を行った結果，有意差がみられた($t$(198)=2.20, $p$ <.05)。女性($M$=2.07)よりも男性($M$=2.33)のほうが浮気への憧れ得点が高かった。

**浮気の積極的容認**　浮気の積極的容認得点に対して，性別による t 検定を行った結果，有意差はみられなかった($t$(198)=−1.56, $n.s.$)。性差はみられなかった。

**浮気の消極的容認**　浮気の積極的容認得点に対して，性別による t 検定を行った結果，有意差はみられなかった($t$(198)=0.49, $n.s.$)。性差はみられなかった。

Table 3　浮気に対する態度の性差

| 浮気態度 | 被調査者の性別 男性 | | 女性 |
|---|---|---|---|
| 否定的態度 | 3.86 (0.66) | | 3.71 (0.67) |
| 浮気への憧れ | 2.33 (0.93) | > | 2.07 (0.73) |
| 積極的容認 | 2.88 (0.77) | | 3.05 (0.76) |
| 消極的容認 | 2.99 (1.06) | | 2.93 (0.91) |

評定値は，1〜5 点の得点を取りうる。( )内は標準偏差 不等号は有意な差を示す。

### 3.4. 浮気意志

#### 3.4.1. 浮気意志の性差

男女により浮気意志が異なるかを検討した(Table 4参照)。浮気への関心・興味，浮気願望，浮気機会(機会があれば浮気をしたい)，の3項目について，性別によるt検定を行った。

**浮気への関心・興味**　浮気への関心・興味得点に対して，性別によるt検定を行った。その結果，有意差がみられた($t(198)=2.16$, $p<.05$)。女性($M=1.80$)よりも男性($M=2.18$)のほうが浮気への関心・興味得点が高かった。しかしながら，その得点自体は，男女ともに非常に低いものであった。

**浮気願望**　浮気願望得点に対して，性別によるt検定を行った。その結果，有意差がみられた($t(198)=2.18$, $p<.05$)。女性($M=1.62$)よりも男性($M=1.98$)のほうが浮気願望得点が高かった。しかしながら，その得点自体は，男女ともに非常に低いものであった。

**浮気機会**　浮気機会得点に対して，性別によるt検定を行った。その結果，有意傾向がみられた($t(198)=1.77$, $p<.10$)。女性($M=1.68$)よりも男性($M=2.00$)のほうが浮気機会得点が高い傾向がみられた。女性よりも男性のほうが適当な相手がいれば，浮気をする意志が高い傾向がみられた。しかしながら，その得点自体は，男女ともに非常に低いものであった。

Table 4　浮気意志における性差

| 浮気意志 | 被調査者の性別 男性 | | 女性 |
|---|---|---|---|
| 関心・興味 | 2.18<br>(1.34) | ＞ | 1.80<br>(1.14) |
| 浮気願望 | 1.98<br>(1.31) | ＞ | 1.62<br>(1.01) |
| 浮気機会 | 2.00<br>(1.35) | | 1.68<br>(1.13) |

評定値は，1～5点の得点を取りうる。( )内は標準偏差 不等号は有意な差を示す。

### 3.4.2. 恋愛経験，性経験による浮気意志の違い

**恋愛経験による浮気意志の差異**

これまでの恋愛経験により，浮気意志が異なるかを検討した(Table 5 参照)。各浮気意志得点に対して恋愛経験のあり，なしによるｔ検定を行った。

**浮気への関心・興味**　浮気への関心・興味得点に対して，恋愛経験の有無によるｔ検定を行った。その結果，有意差はみられなかった($t$(198)=0.12，$n.s.$)。恋愛経験の有無により，浮気への関心・興味は異ならなかった。その得点自体が，非常に低かった。

**浮気願望**　浮気願望得点に対して，恋愛経験の有無によるｔ検定を行った。その結果，有意差はみられなかった($t$(198)=0.13，$n.s.$)。恋愛経験の有無により，浮気願望は異ならなかった。その得点自体が，非常に低かった。

**浮気機会**　浮気機会得点に対して，恋愛経験の有無によるｔ検定を行った。その結果，有意差はみられなかった($t$(198)=0.78，$n.s.$)。恋愛経験の有無により，機会があれば浮気したいという行動意志は異ならなかった。その得点自体が，非常に低かった。

**性経験による浮気意志の差異**

これまでの性経験により，浮気意志が異なるかを検討した(Table 6 参照)。各浮気意志得点に対して性経験のあり，なしによるｔ検定を行った。

**浮気への関心・興味**　浮気への関心・興味得点に対して，性経験の有無によるｔ検定を行った。その結果，有意差はみられなかった($t$(198)=0.90，$n.s.$)。性経験の有無により，浮気への関心・興味は異ならなかった。その得点自体が，非常に低かった。

**浮気願望**　浮気願望得点に対して，性経験の有無によるｔ検定を行った。その結果，有意差はみられなかった($t$(198)=1.35，$n.s.$)。性経験の有無により，浮気願望は異ならなかった。その得点自体が，非常に低かった。

**浮気機会**　浮気機会得点に対して，性経験の有無によるｔ検定を行った。その結果，有意傾向がみられた($t$(198)=1.85，$p$ <.10)。性経験のない人($M$=1.70)よりも性経験のある人($M$=2.03)のほうが浮気機会得点が高い傾向がみられた。性経験のない人よりも性経験のある人のほうが，適当な相手がいれば，浮気をする意志が高い傾向がみられた。しかしながら，その得点自体は非常に低いものであった。

Table 5　恋愛経験による浮気意志の差異

| 浮気意志 | 過去の恋愛経験 | |
|---|---|---|
| | あり | なし |
| 関心・興味 | 2.01<br>(1.30) | 1.98<br>(1.17) |
| 浮気願望 | 1.82<br>(1.21) | 1.79<br>(1.15) |
| 浮気機会 | 1.90<br>(1.32) | 1.75<br>(1.20) |

評定値は，1～5点の得点を取りうる。( )内は標準偏差を示す。

Table 6　性経験による浮気意志の差異

| 浮気意志 | 性経験 | |
|---|---|---|
| | あり | なし |
| 関心・興味 | 2.09<br>(1.37) | 1.93<br>(1.16) |
| 浮気願望 | 1.93<br>(1.33) | 1.71<br>(1.05) |
| 浮気機会 | 2.03<br>(1.43) | 1.70<br>(1.13) |

評定値は，1～5点の得点を取りうる。( )内は標準偏差を示す。

## 4. 考　察

本研究の目的は，日本の現代青年における恋愛状況と浮気に対する態度や浮気意志について調べることであった。具体的には，まず，現代青年の恋愛経験，性行動などを把握する。次に，恋人がどのような行動をとったときに，浮気と判断するか？という浮気判断について調査をする。さらに，現代の青年が，浮気に対してどのような態度をもっているか，実際の浮気への行動意志をどの程度持っているかを明らかにすることを目的とした。

### 4.1. 現代青年の恋愛状況

被調査者である大学生の 68.5%が，これまでに異性とつきあった恋愛経験を持っていた。被調査者の約 60%は大学 1 年生であったことから考えると，現代青年においては比較的早い段階で，恋愛を経験していることがわかる。男女別にみると，女性のほうの恋愛経験率が高かった。次に，これまでに恋人と別れた経験のある大学生は，全体の 63.0%であり，恋愛経験のある人のほとんどが恋人との別れも経験していた。その回数にはばらつきがみられたが，最も頻度の多かった回数は 1 回であり，18，19 歳の青年もそれまでに 1 度は別れを経験しているようである。男女別にみると，恋愛経験の多い女性のほうが，別れの経験も多かった。

他方，性経験については，これまでに性経験のある大学生は全体の 45.5%であった。約半数の大学生が性経験があった。男女別にみると，性経験のある男性は 38.7%，女性は 53.2%であった。大学 1 年生から 4 年生までの性経験率を調べた日本性教育協会(2001)によると，1999 年の大学生の性経験率は，男性 62.5%，女性 50．5%であった。この結果と本研究の結果を比較すると，男性の性経験率は低かった。本研究の被調査者の 60%が 1 年生であったことから考えると，男性は 2 年生以降に性経験率が高まることが予想される。他方，女性は大学 1 年までに性経験があることが予想される。今回の調査では，大学生の約 70%が恋愛を経験しているが，それらは必ずしも性経験を伴うものではないことが示された。

### 4.2. 浮気行動の判断基準

自分の恋人が他の異性とどのような行動を取った場合に，浮気と判断するかを分析した。その結果，90%以上の人が「浮気ではない」と判断した行動は，異性に挨拶をした(97.5%)，異性と立ち話をしていた(96.5%)，彼(女)が相手に声をかけた(91.0%)であった。これらは，通常大学生が儀礼的にも異性友人と行う行動であり，これらの行動は浮気と判断されないことが明らかとなった。次に，「どちらともいえない」が 30%以上で最頻回答となり，判断が分かれた行動は，異性と 2 人きりで歩いていた(46.2%)，誕生日のプレゼントを贈っていた(42.2%)，用もないのに電話をしていた(46.7%)，相手の肩や髪に触れた(43.7%)であった。この中で，恋人以外の人に誕生日プレゼントを贈るという行動や用もないのに電話をするという行動については，その際に自分の恋人がどのような感情で行っているかが判断できないため，「どちらともいえない」という回答が増えたと思われる。また，恋人以外の異性の肩や髪に触れるという身体接触も浮気の判断が分かれた。また，恋人以外の異性との“2 人だけ”の行動に対しては，浮気と判断される可能性が示された。特に，「2 人だけで旅行」という行動については顕

著であった。最後に,90%以上の人が「浮気である」と判断した行動は,キスをしていた (96.0%),性的関係をもっていた(97.0%)であった。身体接触の中でも，恋人以外の異性と「キスをする」という行為とそれ以上の行為は，浮気と判断されることが示された。男女別でも，その比率を比較したが顕著な性差はみられなかった。

この結果を増田(1994)と比べると，増田(1994)においては「二人だけで映画に行く」という行動から「大変好ましくない」という判断の平均値が高くなり，「お互いの家をひとりで訪ねる」，「肩や髪に触れる」，「手をつなぐ」，「抱き合う」，「キスをする」では「大変好ましくない」という値が高かった。これらの結果は，本研究とほぼ同様の結果といえるだろう。つまり，「恋人以外の異性と2人だけで行動をすること」が浮気の1つの要素となり，さらに，「恋人以外の異性とキスをする」，「恋人以外の異性と性的関係をもつ」という行動基準，「恋人以外の異性とキス以上の関係を持つ」ことが完全に浮気と判断される行動基準となることが示唆された。

### 4.3. 浮気に対する態度の構造と性差

まず，浮気に対する態度尺度を作成した。独自に作成した浮気に対する尺度項目に回答を求め，その評定値に対して因子分析を行なった。その結果，4因子を抽出した。それらの因子は，浮気に対して否定的な考えを示す「浮気への否定的態度因子」と浮気に憧れる，浮気を容認する因子である「浮気への憧れ因子」，「浮気の積極的容認因子」，「浮気の消極的容認因子」に分かれた。全体的には，浮気を否定的に評価する「浮気への否定的態度因子」得点が高く，他の因子得点が低かった。このことから，現代青年が浮気に対して否定的な考えを持っていることが明らかとなった。

次に，浮気に対する態度の各因子が男女により異なるかを検討した。各因子得点を男女間で比較した結果，「浮気への憧れ」において性差がみられた。女性よりも男性のほうが浮気への憧れが高かった。男性のほうが浮気に対して憧れを持っている傾向がみられた。しかしながら，その得点は，2.33(1～5点)であり，決して高いものとはいえなかった。それ以外の因子には有意差はみられなかった。つまり，浮気に対する態度に性差はほとんどみられないが，男性は女性よりも浮気に憧れを持っているといえるだろう。

### 4.4. 現代青年の浮気意志

男女により浮気意志が異なるかを検討した。その結果，浮気への関心・興味，浮気願望においては，女性よりも男性のほうが浮気に関心・興味を持ち，してみたいと思っていた。浮気に対する態度では，「浮気への憧れ」において男性が女性より強い傾向がみられたが，これと同様に，男性のほうが浮気に関心を持ち，浮気願望を持っていた。しかしながら，その程度は関心・興味で2.18(1～5点)，浮気願望で1.98(1～5点)と非常に低いものであった。さらに，適当な相手がいれば，浮気をしたいという浮気機会においても，傾向差がみられた。女性よりも男性のほうが適当な相手がいれば，浮気をしたいという意志が強かった。しかし，この程度も2.00(1～5点)と非常に低いものであった。これらの結果から，男性は女性よりも浮気に関する

興味をもっており，願望も強いが，その程度は非常に低いものであることが明らかとなった。

次に，これまでの恋愛経験により，浮気意志が異なるかを検討した。その結果，浮気への関心・興味，浮気願望，浮気機会，いずれにおいても，恋愛経験の有無による差はみられなかった。恋愛経験の有無により，浮気意志に差はみられなかった。しかしながら，本研究での被調査者の約 60%は 1 年生であり，恋愛経験のある人でも，つきあった人数は 1 名という人が多かった。したがって，より幅広い年齢層を被調査者とし，恋愛経験を分類することができれば，恋愛経験によっても浮気意志が変わるかもしれない。次に，これまでの性経験により，浮気意志が異なるかを検討した。その結果，浮気への関心・興味，浮気願望においては，性経験による差はみられなかった。性経験があるかないかにより，浮気への関心・興味，浮気願望は異ならなかった。他方，適当な相手がいれば，浮気するという意志は，性経験のない人よりも性経験のある人のほうが高い傾向がみられた。しかしながら，その程度は非常に低いものであった。このことから，機会があれば浮気をするという浮気意志に対しては，恋愛経験よりも性経験の影響が強いことが示唆された。

### 4.5. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点と今後の課題について述べる。本研究の問題点は，被調査者が比較的若い青年期前期に限られていることである。大学生を調査対象としたが，実際には 1 年生が約 60%，1，2 年生の割合は 80%を越えていた。したがって，現代青年の恋愛状況を調査するにはサンプルの年齢層が狭かったと考えられる。そのために，恋愛経験の有無においても，浮気意志にあまり差がみられなかったのかもしれない。大学生においては，3，4 年生の被調査者を増やし，可能であれば 20 代の社会人のデータを加えることが必要であろう。最後に，今後の課題を述べる。まず，現代青年の実際の浮気経験を調べる必要がある。その際には，浮気をしたことがあるという浮気体験と浮気をされたことがあるという被浮気体験を区別しなければならない。次に，浮気をしたことのある人，されたことのある人を対象とし，浮気の状況について明らかにする。浮気相手，浮気した理由などを詳細に分析していく。最後に，浮気関係の終焉の理由，浮気後の心理状態などについて調べていく。

## 引 用 文 献

古畑和孝 (1990). “愛”の特集号の編集にあたって―愛の心理学への序説― 心理学評論, **33**, 257-272.

牧野幸志 (2009). 青年期における恋愛と性行動に関する研究(1) ―デート状況と性行動の正当性認知との関係― 経営情報研究, **16**, 1-10.

増田匡裕 (1994). 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, **34**, 164-182.

松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.

松井 豊 (1993). 恋ごころの科学 サイエンス社

NHK放送文化研究所(編) (2000). 現代日本人の意識構造 第5版 日本放送出版教会

NHK放送文化研究所(編) (2004). 現代日本人の意識構造 第6版 日本放送出版教会

日本性教育協会(編) (2001). 「若者の性」白書―第5回青少年の性行動全国調査報告 小学館

Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.

相馬敏彦・浦 光博 (2007). 恋愛関係は関係外部からのソーシャル・サポート取得を抑制するか―サポート取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信頼感の影響― 実験社会心理学研究, **46**, 13-25.

相馬敏彦・山内隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性がそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, **43**, 75-84.

和田 実 (2004). 大学生の性に対する態度, 性行動と恋愛について 東京学芸大学紀要第1部門(教育科学), **45**, 155-165.